

《谷崎源氏》考 (三)

——『潤一郎新訳源氏物語』愛蔵本における改訂に関する調査報告(補)——

中村ともえ

補論 卷三〜五の改訂について

「新訳」愛蔵本の序文には、「特に卷一と卷二とは字句に修正を加へた箇所も少くない」と記されていた。本研究は、谷崎のこの言葉を手がかりに、調査範囲を卷一・二(「桐壺」〜「胡蝶」)に限定した(「谷崎源氏」考(一)一章参照)。

実際、この言葉を裏付けるように、改訂は卷一・二まででほぼ終息する。ただし、卷一・二と比べるとわずかではあるが、卷三以降にも若干の改訂が見られる。本稿では、まず卷三〜五の改訂の実態を調査し、その上で全篇にわたって確認される表記・ルビの改訂について整理する。

卷三〜五の改訂は、以下の通りである(初刊↓愛蔵本、頁・行は初刊による)。

卷三(「蛭」〜「若菜下」) 20例
 ・優る↓勝る(「常夏」) 29頁8行)
 ・盤渉調「はんしきてう」↓盤渉調「はんしきでう」(「篝火」) 47頁14行)

・煩「わづら」つて↓患「わづら」つて(「行幸」) 75頁3行)
 ・優り劣り↓勝り劣り(「行幸」) 87頁10行)
 ・煩「わづら」ひ↓患「わづら」ひ(「真木柱」) 119頁14行)
 ・優り劣り↓勝り劣り(「梅枝」) 155頁3行)
 ・優つて↓勝つて(「藤裏葉」) 175頁12行)
 ・優つた↓勝つた(「藤裏葉」) 177頁14行)
 ・過「あやま」ち↓過ち(「若菜上」) 15頁1行)
 ・含羞「はにか」み↓羞澁「はにか」み(「若菜上」) 43頁10行)
 ・過「あやま」ち↓過ち(「若菜上」) 49頁15行)
 ・優「まさ」り↓勝「まさ」り(「若菜上」) 55頁6行)
 ・過「あやま」ち↓過ち(「若菜上」) 85頁12行)
 ・懐かし↓懐しく(「若菜上」) 88頁4行)
 ・懐かしい↓懐しい(「若菜上」) 93頁9行)
 ・過「あやま」ち↓過ち(「若菜下」) 108頁8行)
 ・含羞「はにか」んで↓羞澁「はにか」んで(「若菜下」) 124頁2行)
 ・優つて↓勝つて(「若菜下」) 133頁11行)
 ・過「あやま」ち↓過ち(「若菜下」) 153頁13行)

・懐かしい↓懐しい（「若菜下」） 178頁12行）

卷四（「柏木」）↓「総角」 11例

・過「あやま」ち↓過ち（「柏木」） 4頁9行）

・過「あやま」ち↓過ち（「柏木」） 7頁11行）

・過「あやま」ち↓過ち（「柏木」） 13頁11行）

・懐かし↓懐しく（「柏木」） 25頁1行）

・盤渉調「ばんしきてう」↓盤渉調「ばんしきでう」（「横笛」

52頁2行）

・伺候↓祇候（「夕霧」） 90頁12行）

・伺候↓祇候（「夕霧」） 134頁5行）

・含羞「はにか」んで↓羞澁「はにか」んで（「橋姫」） 65頁3

行）

・御忌↓御忌「おんいみ」（「椎本」） 116頁11行）

・仲人「なかうと」↓仲人「なかうど」（「椎本」） 129頁3行）

・含羞「はにか」む↓羞澁「はにか」む（「総角」） 178頁3行）

卷五（「早蕨」）↓「夢浮橋」 4例

・懐「なつ」かしさ↓懐「なつか」しき（「寄生」） 114頁3行）

・哀れ↓あはれ（「寄生」） 114頁4行）

・人形「ひとがた」↓人形「ひとかた」（「東屋」） 104頁12行）

・人形「ひとがた」↓人形「ひとかた」（「蜻蛉」） 104頁15行）

このように、卷三〜五の改訂は、ごくわずかであり、種類も表記・ルビに関するもの（分類記号E1・E2）に限られている。

*

既に三章で確認したように、表記・ルビの改訂は、他の種類の改訂が愛蔵本巻一の範囲に集中するなか、巻一・二を通じて一定数見られる（〈谷崎源氏〉考（二）別表参照）。巻三〜五になると、他の種類の改訂はなく、表記・ルビの改訂のみが確認される。

これら表記・ルビの改訂は、巻一から巻五までの全篇を通じて、特定の単語を中心に行われている。

ルビは、

・過「あやま」ち↓過ち 9例

等の削除ないし追加、あるいは

・人形「ひとがた」↓人形「ひとかた」 3例

等の清音濁音の違いだけで、別の語句に改める（単語のよみ方を変更する）ことは原則的にない。

表記は、

・優る↓勝る 18例

・含羞「はにか」む↓羞澁「はにか」む 15例

・伺候↓祇候 3例

のように、漢字を別の漢字に改める場合（ただし、本文中のこれらの単語がすべて改訂の対象になるわけではない）と、

・対屋↓対の屋 7例

・懐かしい↓懐しい 6例

のように、単語の表記の一部を改める場合がある。

後者は、同じ単語の送り仮名を揃えるために行われたものと考えられる。他に、行く末↓行末、恐しい↓恐ろしい、間違ひ

↓間違（各1例）も、送り仮名の統一の例としてまとめられよう。

中央公論社の編集者として愛蔵本を担当した伊吹和子は、谷崎から「送りがなを統一するなど、『桐壺』から改めて読み直してみしてほしい」との指示を受け、『本文の誤植の再点検』等を行ったと証言している（一章参照）。送り仮名の統一は、伊吹が実際の作業を担ったものと推測される。なお、誤植の訂正（G）も少数ながら確認され（別表参照）、これも伊吹の証言

と合致する。

〔付記〕

・本研究は日本学術振興会科学研究費補助金（研究活動スタート支援22820031）の助成を受けたものである。

（なかむら ともえ・静岡大学専任講師）